第八章　教育・文化

第一節　学校教育

一、明治以前の教育と私塾

(一)　明治以前の概観

太古からの教育が、どのように行われてきたかについては、残された記録もなく、確かな文献もなく、推理と想像による以外にないのであって、勿論特定の教育機関が存在する筈もなく、教育という定義さえ明確に意識されていたとはいえ難い。

庶民は家の中で、親から子へ自分達の生活に最も関係深いものを教え伝え覚えさせるという営みがくり返される、いわば経験することによって生産や生活の智恵を授けて来たのが事実であり、全くの実学主義とでもいえよう。その中には「見よう見まね」という模倣もあったろうし、親や年長者が意図的に機会をとらえて指導の手をさしのべたことも考えられる。家庭においては人間共同社会における躾も教え伝えられ、村落という集団生活の中での習慣や秩序も身につけていったものと思われる。これを教育とよぶには余りにも雑ぱくというべきかも知れない。陸奥では村上天皇の天暦時代（九五〇年頃）石背郡に平貞盛の孫平維茂が学事を奨励したのが教育の初見であるといわれている。

それより降って、教育の姿が次第に明確になったのは鎌倉時代に僧侶が附近の子供を集め、読み書きを教えた。即ち「寺子屋」である。寺子屋に学ぶ子供を「寺子」といい、入学することを「寺入り」といっている。

室町時代から桃山時代末期にかけての戦乱の中にも寺子屋は行われつづけられてきたのであるが、学校機能として制度的に明確な発達のみられるのは江戸時代である。

一つには数の増加、二つには種類が多くなったこと、三つには組織が整ってきたことなどが特色としてあげられる。庶民教育のための寺子屋、武士と庶民両面にまたがった私塾、武士教育のための藩学、藩学に向かって強い指導力となった林家の塾と幕府直営の昌平坂学問所などである。好学の五代将軍綱吉は元禄四年（一六九一）神田湯島昌平坂上に壮麗な建築の聖堂を建立し、享保三年（一七一八）九月からは一定の講釈日を定め常時聴講出来る仕組みをたてており、又聖堂建築にあたり、仰高門の門内に新しく東舎を設けて講釈所にあて、享保二年（一七一七）からは日講制をとり、午前十時から十二時まで休日なしに開講し、武士ばかりでなく庶民の聴講をも認めた。

この日講制は幕末に至る一五〇年間、絶ゆることなく継続されて

おり、官学のおこりともみられる。更に第八代将軍吉宗は中興の英主ともいわれるが、庶民に掟を熟知させるため寺子屋を保護奨励しており、それ以来急速に都市は勿論のこと農村にも普及し、一町一村に寺子屋のないところはないまでになった。

幕末のころには、庶民の知的自覚によって寺子屋は急激にその数を増してくるのであるが、天保期にあっても江戸では毎年一四一・七校増加していたと伝えられている（『時代考証事典』及び『日本文化史大系』）。

会津の藩校としては、全国屈指の日新館があげられるが、日新館はもと民間で桂林寺町に寛文四年（一六六四）稽古堂として生まれ、延宝二年（一六七四）藩士の学問所として講所が郭内に建てられたのが前身であって、その総合的な充実計画に添え寛政十一年（一七九九）四月に着工し、享和三年（一八〇三）に完成と足かけ五年の歳月を費したのが藩校日新館であり、画期的なものであった。内部には孔子の像を祀り、素読所（小学）・講釈所（大学）をはじめ、書学寮・礼式方・私学寮・神道方・数学方・皇学方・天文方・医学寮などがあり、また、刀・槍・弓・馬・砲術・大砲方・水練場なども備えられ、文武の専門的な学舎が並び、幕末には新しい西洋の学問のために蘭学所も開設された（『会津若松の歴史』）。

(二)　西山地区の私塾

柳津町の地域に「寺子屋」又は「塾教育」が何時頃から行われていたのか、資料もなく詳にすることは出来ないが『福島県教育史』の中に、次のように記載されているので年代順にあげてみる（『日本教育史資料』八巻二三）。

寺子屋・塾教育一覧表

大沼郡（寺子屋）

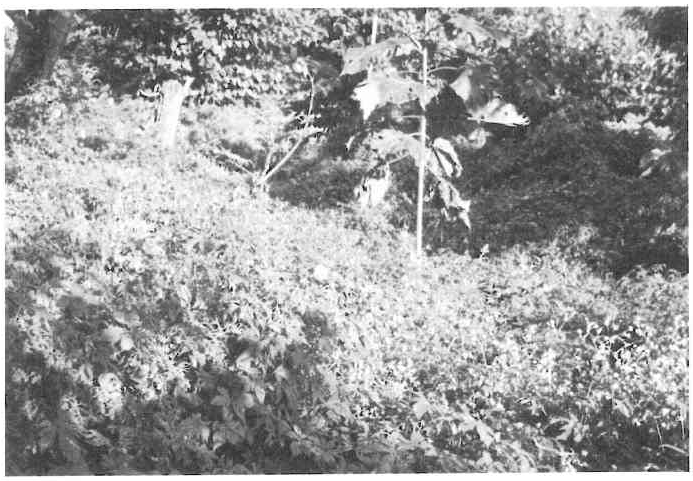
名称	学科	管轄	所在地	開業	廃業	教師数	生徒数	調査年度	身分	習字師氏名
	筆道読書	会津領	大成沢	天保元年(1830)	明治5年(1872)	男1	男5	明治5年	村吏	鈴木　庄左衛門
	筆道読書	会津領	四つ谷	天保元年(1830)	明治5年(1872)	男1	男8	明治5年	村吏	菊地　儀平
	筆道読書	会津領	胄中	天保2年(1831)	明治5年(1872)	男1	男7	明治5年	村吏	二瓶　宗吾郎
	筆道読書	会津領	久保田	天保10年(1839)	明治5年(1872)	男1	男11	明治5年	修験	小野　左京
	筆道読書	会津領	黒沢	嘉永元年(1848)	明治5年(1872)	男1	男7	明治5年	村吏	伊藤　三十郎
	筆道読書	会津領	砂子原	嘉永元年(1848)	明治5年(1872)	男1	男6	明治5年	僧	山内　泰教
	筆道読書	会津領	砂子原	嘉永元年(1848)	明治5年(1872)	男1	男15	明治5年	村吏	箕田　直衛
	筆道読書	会津領	牧沢	嘉永2年(1849)	明治5年(1872)	男1	男7	明治5年	村吏	天野　保三
	筆道読書	会津領	湯八木沢	嘉永2年(1849)	明治5年(1872)	男1	男7	明治5年	医師	小島　左伸
	筆道読書	会津領	五畳敷	文久元年(1861)	明治5年(1872)	男1	男7	明治5年	村吏	猪俣　安次

河沼郡

文耕堂	漢籍	会津領	柳津	…	…	男1	男30 女5	慶応元年	…	武井　重蔵

開塾の最も古いのは、今より一四五年前の天保元年（一八三〇）で、会津藩日新館の完成より約二十七年後のことである。身分の多くが村吏となっているが、本県寺子屋教育一覧表（福島県教育会編『福島県教育史』）によると、名主と示されている人もあり、単に農とだけ記されている人もみられる。調査年代によって、又、行政的変遷との関連もあり、村吏と示されているとも推考される。

廃業は、学制発布と時を同じくし明治五年となっているが、砂子原・五畳敷・黒沢は廃業と同時に新学制に移行し、砂子原小学校の創立となったのである。しかしその他については、なお、しばらく実際には続けられていたものと見られる。



五畳敷教育の行われた殿倉屋敷跡地

当時の教育は学則教則があるわけでなく、自由意志による入退も認められ、統一された教程教法があるわけでなく、教師その人の信念によって教えられ、人格との接触によって陶冶されたものと見るべきであって、封建治下にあっては職業は世襲であり、士農工商等の区分は判然としており、そのめざすところは善良な民の教育であり、人倫を教え、神仏を信心し、節倹を尚び、勤労を重んじ、平和で安楽な生涯をということにあったといえよう。どの時代にどのような教科書を教えたのかは明らかでないが、蒐集した若干のものを挙げてみると（以下主として伊藤三十郎蔵）、

経典余師（論語）　経典余師（孟子）
近古史談　世俗通用一筆啓上
諸證文手形文言　小学外篇句読（善行）
天文図解巻三　古状揃精注鈔
十八史略　商売往來　庭訓往來
花鳥百人一首　倭漢朗詠集　簡単な文章
今川了俊愚息対仲秋制詞条々　その他　小学　四書　五経
日本外史

等が用いられたようである。

その他、指導のために用いられたものに『地獄絵掛図』七軸がある。こうした具象画をとおし、信仰をもととした人間形成、あるいは民衆教化資料とみられ「寺から起こった学校教育」ということを裏付けし物語っていると思われる。心の支えを宗教に求め、信仰を通し清浄心を養い品性を高めるよう指導し、教化を図ったものとみ

られる。

又、二宮尊徳の「報徳訓」の掛軸も残っていたが「報徳訓」の掛軸は西山地域内の数多くの家庭で所持されているようであるが、この普及は寺子屋や私塾の教育によって広がったのか、報徳講というような講組織でもあったのか、とも考えるが、報徳組織のあったということは資料として残ってもいないし、当時の組織についても伝わっていないようである。

報　徳　訓

父母根元在天地令命　身体根元在父母生育
子孫相続在夫婦丹精　父母富貴在祖先勤功
吾身富貴在父母精善　子孫富貴在自己勤労
身命長養在衣食住三　衣食住三在田畠山林
田畠山林在人民勤耕　今年衣食在昨年産業
来年衣食在今年艱難　年々歳々不可忘報徳

教えるこころは「父母根元在天地令命、身体根元在父母成育…」と天然の理法に基づき自己の存在を知り、人としての道を正しく行い天地人の恩に報えるよう健康・勤労と産業・子孫の繁栄・一家和楽等の徳を中心においた指導であったとみられる。

更に、非常に創意と工夫がこらされ、しかもわかり易いように配慮し、具体的に絵を以て示し、視覚に訴えた掛図である。表題として、

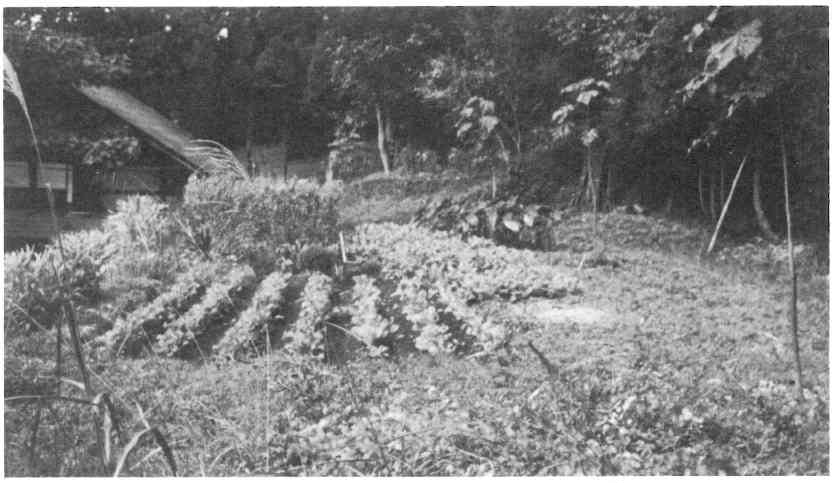
「人生行路之想像」

善悪ニタ通ノ岐ルル所
其ノ差、僅ニ寸尺ノミ
而モ最後ノ径庭ハ如何
嗚呼　可畏……

と左上隅に記され、小学校の側から道は二つにわかれ、そこに「人生追分」が立ててあり、左善道、右悪道と表示され、左に倒れば勉強川・孝行橋・手伝・勤勉等があり最後は安楽の森へ、右は喧嘩川・腕白橋・買杭・ウソ鳥・不孝道・酒呑横町などを終えて最後は一家破滅する。その道程を図示しているもので非常に説得力に富んだユーモアを含んだほほえましい資料である(以上漆峠鈴木庄軒氏蔵)。その他、蚕病予防図などもあるが、これは後代の養蚕農家の啓発用のものであるとみられる。

冑中の私塾は、重なる家庭の不幸により、唯一人生残者となった二瓶宗吾郎が自宅の六畳間を解放し、村落内の子供達に手習、その他を教授していたと語られている、学校屋敷跡と呼ばれる約七十四坪程の野菜畑は学制がしかれてからのものとみてよいと思われる。

五畳敷では、年貢ろうを納める殿倉を塾として用いたといわれており、約二畝位の平地がその跡という。師匠は猪俣安次という方であって、身分は農または村吏と示されているが、田島出張所より五畳敷村肝煎役を申し付けられたり砂子原村も兼務をしている。明治



学　校　跡　地（胄中）

九年には五畳敷村用掛、十一年には五畳敷・湯八木沢村用掛を第十六区会所から申し付けられており、明治十二年には戸長として農事通信係を大沼郡役所から申し付けられている。その他大沼郡砂子原・湯八木沢小学区学務委員（明治十四年―福島県）・砂子原村組衛生委員（明治十七年―戸長役場）・生蝋改良について褒賞、徴兵事務等々明治初年から諸制度の改変の中にあって、各方面のことに尽力した事蹟が充分に偲ばれ優れた人材であったことが明らかである。唯文久元年開業の私塾の模様を伝える文献や記録は見当らない。僅かに大算盤（縦十一センチメートル、横五十一・五センチメートル）があり、裏に文久四年と記されているのから推して指南用のものでなかったかと考えられる。

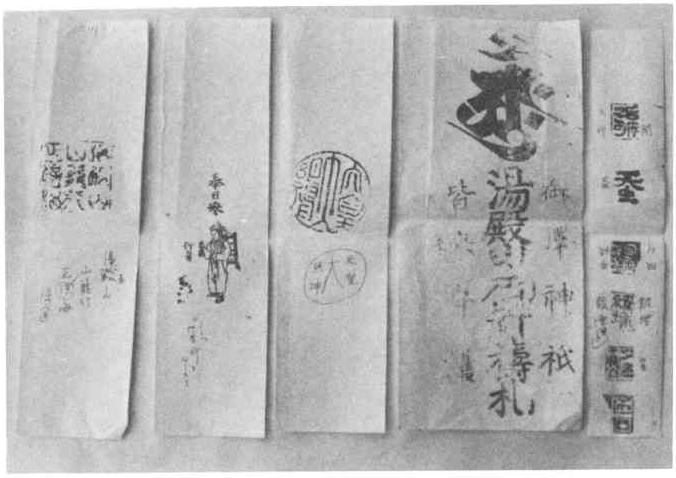
不動明王堂（現在は九々明にあり）

四ツ谷（高森）の塾のおこりについて語り継がれているのは、高森の集落より東北に約三キロメートル、魚留川の流れに沿う後岳の不動滝に御堂があり近隣の人々も良くこの不動尊に参詣していたが、ここに一行者が参篭するようになったという。そのうち時を経て、菊地宇三郎という方と懇意となり、尋ね来ては宿泊するようになった。後に民家を借り「四書五経」等、村落内の子供達に教えたという。この行者が背負ってきた笈は今も家宝の一つとして、菊地長三氏宅に保存されている。その笈の中の資料から、

光照山不動院―山伏（法印）

出生地　羽前国米沢市龍田町字外之内
士族　俗名　佐藤義一（藤原教信）
嘉永五年六月二十六日生　行歳四十八歳

などのことがわかる。後この行者は沢中に移り、老婆の手厚い看護に感謝しながら、その生涯を閉じたといわれる（沢中菊地清美氏宅）。墓石もあり「火盗除御守御岳神社・光照山・岩代国・東川村・四ツ谷不動院山篭行人」と刻まれている。



笈の中より発見された祈禱札等（菊地長三氏所蔵）

塾については、後に小山三次という人が長い間民家で教授したと伝えられるが、集落のほとんどが火災のため焼け出されているので、詳細を伝える資料はない。学制がしかれて以後に到るまでも教育事情は、いろいろな変遷を重ねているのが、僻地の教育の実情かとも見られる。砂子原・牧沢・湯八木沢・田代のの私塾については、大火で全焼したということや、家屋の移転に伴って資料が散逸してしまった事や世代が新しくなったために、充分その間の事情が継承されていないこと等もあって、明らかにすることが出来ない。

(三)　柳津地区の私塾

柳津を中心とした寺子屋及び塾教育に関する記録や資料は、残されたものが少なく僅に『福島県教育史』第一巻に（日本教育資料巻二三）、文耕堂・柳津村・武井重蔵・男三十人、女五人に漢籍を教えたことが記録されているが、開塾、廃業年月日も、身分も明示されていないが、福島県教育会編『福島県教育史』の中に、河沼郡柳津・名主・竹井重蔵・教科として、読・書・算を指導したことが記されている。姓の一字が異なってはいるが、同一人物であるが調査時の誤りあるいは改姓ということも考えられないわけではない。又調査時代による相異ともみられるが、この塾がどこの集落にあったのか、その後どうなったのか、名主という家柄でもあり、姓からおしても判明するように考えるが今のところ明確に出来ない。そのほか、記録としては残されていないが猪鼻には、会津藩の武士で同地に迎えられて漢学塾を開き、多くの門人を教導したとみられる松尾権五郎の墓がある。師の徳を慕え、冥福を祈った門人達が建てたもので、土台石には、門人の名が書連ね刻まれている。

更に大字長倉には飯渓堂（えふたにどう）があり、目黒重介・目黒三郎の親子が師となり、漢籍（四書五経・日本外史・近古史談）、算盤、習字を教授

松尾権五郎の墓（猪鼻）

（正　面）

教山松尾庵主

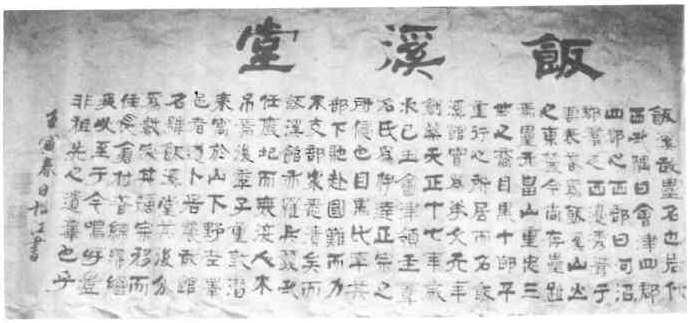
（右）明治廿五年十一月十一日

門人之代表者名

（左）会陽士松尾権五郎墓

長倉　小ノ川
目黒　重人　増井孫三郎
目黒　重郎　郷戸
猪鼻　斎藤長次郎
佐々木平吉　塩原寅太郎
佐々木留三　田崎信次郎
佐々木熊三郎　小柳津
真田　漬喜　佐々木伊佐美
角田　信吉　大野
角田新太郎　白井　俊夫
真田　熊蔵　黒滝
岩佐忠二郎　二瓶徳次郎
角田　伊吉　芳賀　栄吉
真田　熊次　芳賀　儀八

し、三郎の妻ヒサも和裁の教師を永年勤めている。教えを求める門人の参集範囲も広く、長倉をはじめ柳津・出倉・小野川・中野・滝谷・湯八木沢・桧ノ原・野老沢・小巻藤・細越・八坂野辺にまで及んでおり、毎年晩秋の十一月から翌春三月まで、三十五名位の青少年が集い、学習に励んだが遠方から来集した門人のためには自宅を開放し、自炊を営ませ自主的な生活態度を養い立派に社会生活の基礎を身につけさせる、いわば生活経験を通した全人教育の理念に立って、ともいえよう。こうした教育が親子二代、家族ぐるみともいうべき姿でおよそ三十年近く（明治三十年頃から大正末期まで）も行われてきたことは特筆されてしかるべしと思われる。教え子達は、師の生存中、盆・暮れ・節供などには必ず土産を携え訪れては面接し、いつまでも長く敬慕していたと語られている。



飯溪堂（目黒重夫氏所蔵）

二、学校の沿革

(一) 柳津小学校

明治六年三月柳津村外二十ケ村を連合して柳津村円蔵寺を仮校舎とし、小学校初等科を置き開設した。同七年に十二ケ村が分離し、郷戸小学校及び飯谷小学校を設け、各々下等科を置いた。同十五年には今の役場所在である柳津町大字柳津字諏訪町甲五番地に校舎を新築した。同二十年四月一日十二番学区柳津尋常小学校と改称（明治十六年以降七番学区であった）、郷戸・飯谷の両校を廃し、郷戸・飯谷・小椿・藤・大柳に分教場を置いた。その後、飯谷分教場は中山部落に移転した。

明治初年の教科書

同三十一年に高等科が併置され近代教育体制が整った、同三十四年四月には、飯谷分教場を更に麻生部落へ移転のため新校舎が建てられた。

明治四十年に和風二階建の本校々舎が新築された（現在の月見ケ丘の地である）。

大正二年七月五日小椿分教場を廃止し、石坂に季節分教場を設置し、同六年には猪鼻に季節分教場を設けた。大正八年に本校々舎の増築が行われ、同十二年に農業補習学校が併置され児童数の増加と共に狭隘となったので、昭和三年に更に本校々舎の増築が行われた。同六年十二月に奉安殿が建設された。昭和九年には、麻生部落の大雪崩のため飯谷分教場の校舎半壊する惨状にあったが四月猪鼻季節を常設分教場とし、十月には同分教場の校舎が新築落成した。同十年四月一日青年学校が併置され、同年十一月には雪の災害を被った飯谷分教場を大字飯谷字居平乙一一七五の一の地に校舎を新築し移転した。

昭和十二年には本校々舎の増築、郷戸と石坂分教場の校舎が新築され、同十五年には藤分教場を旧校舎西隣に新築（大字藤字松ケ崎二〇八六）、昭和十六年四月一日国民学校令施行により校名を柳津村国民学校と改称したが、翌十七年町制施行により柳津町国民学校となった。

昭和二十一年二月二十二日午後七時三十分頃校内より出火し、折からの吹雪と共に消火作業も意のままにならず、本校の全校舎・備

品・諸帳簿等すべてを焼失する惨事がおこった。この応急対策としてすぐに円蔵寺・奥之院・月光寺・福満座・桜本氏宅・熊野神社・岩坂神社・小巻・安久津の両公会堂等を借用し仮教室として分散授業を実施し、又冬季間は分校所在地の児童は分校に収容するなど多難な一年有余の歳月を余儀なくされた。

同年五月には石坂季節分教場を常設とし、二十二年一月十日待望の新校舎起工式が行われたが、同年四月一日には学校教育法施行により柳津小学校と改称し、高等科が分離して柳津町立柳津中学校となる。同十一月一日新校舎上棟式をあげ喜びのうちに昭和二十三年をむかえたが、四月二十日部落に大火がおこり石坂分校類焼する。五月四日軽井沢分校を仮設置（塩野を猪鼻分校から分離）、六学年までを二学級として軽井沢公会堂を借用し仮教場にあてる。五月五日石坂分校仮校舎建築、十一月二十日本校々舎を大字柳津字上村道乙一五八〇番地に新築落成したが、すぐに授業実施することは出来ず十二月七日に全児童の移転を完了した。

昭和二十四年一月一日軽井沢地区が西山村より分離し柳津町に合併したので、軽井沢・銀山・塩野を学区として軽井沢分校を設置、同年十二月一日八坂野公会堂を仮教場とし八坂野季節分校を設置する。昭和二十五年十二月三十日講堂新築落成、昭和二十九年四月軽井沢分校新築落成、昭和三十年四月柳津町と西山村が合併し、新しい柳津町が誕生した。同三十一年十二月金子平季節分校が民家を借り開設される（一年～六年まで）。同三十二年本校々舎北に四教室を増築する（経費四百万）、三十三年八月三十一日ＰＴＡの據金と薬草採集収益金七万円をもって本校々庭に小鳥飼育舎を新設した。同年十二月十日金子平季節分校の新築落成（五間×二・五間、建築費十万円）、十二月三十日飯谷分校一教室増築（四十万円）、昭和三十四年十月石坂分校一教室増築、同十一月本校湯沸場兼風呂場新設（五万円）、昭和三十七年給水井戸高架タンクを完備する。

昭和三十八年十月十日給食室を新設し完全給食を開始する。同四十年三月三十一日郷戸分校及び猪倉野の二分校を廃校して季節分校とする（郷戸分校に季節保育所開設）。昭和四十一年多年の努力が認められ、福島県保健協会から学校保健優良校として表彰され、又、学校安全福島支部より表彰を受ける。昭和四十二年四月一日特殊学級を一学級新設、学習研究社より学校教育優良校として表彰される。昭和四十三年九月十二日学校給食優良校として、福島県学校給食会より表彰を受ける。昭和四十四年三月三十一日文部大臣より学校統計優良校として表彰され、又同日八坂野分校を休校とする。昭和四十五年三月学校プール竣工する。金子平季節分校は休校となる。昭和四十五年と四十六年と連続、福島県歯科医師会より「よい歯の学校優良校」として表彰される。昭和四十六年飯谷分校に、へき地集会室新築され、四十七年十一月軽井沢分校に職員住宅及びへき地集会室新築落成、飯谷分校は休校となる。六月四日よい歯の学校特別優良校として県歯科医師会より表彰される。昭和四十八年四月一日飯谷分校を開校し、石坂分校を休校する。同年八月、新校舎建築着

工（建坪二、五八四平方メートル、総工費一億五千九百万円）、同十一月三十日郷戸季節分校新校舎落成、昭和四十九年四月一日石坂分校開校、同八月二十日近代建築の粋を誇る新校舎が落成し、その祝賀と共に十一月八日・九日の両日創立百年の記念行事を挙行し、過去をふりかえり、なつかしみ、これからの教育を語りあい、現在をむかえている。

卒業児童総数　八、三五二名（昭和四十八年度末迄）

『歴代校長名』

岡本洋西　米沢軍庫　沖津祖正　高津肇　斎藤吉太郎　紺野通威　斎藤吉太郎　菊地正一　丹羽平治　鈴木重正　大木喜代之進　武内源作　大橋弥太郎　鈴木喜助　伊藤重喜　長谷川富伴　角田長作　五十嵐健之助　伊藤弥吉　内田伊佐雄　五十嵐清七　五十嵐長市

柳津小・中学校の学園環境

『校　歌』

作詞　源後三郎　作曲　佐藤広市

一、流れも清き只見川　輝く歴史柳津の
　わが学び舎に生いたこは
　望み溢れて幸多き

二、平和の光日本の　礎築く民として
　紅葉に花にたぐいつつ
　姿優しく美しく

三、嵐に雪に打克ちて　心を磨き身を鍛え
　学びの道にいそしません
　文化の花とかおるまで

(二) 西山小学校

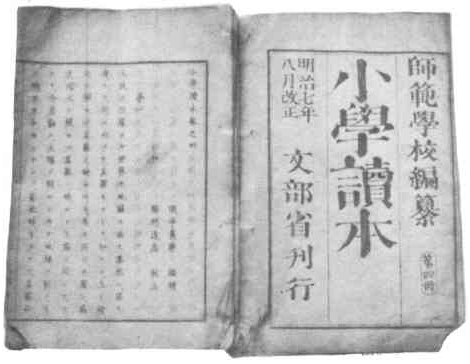
「明治五年八月二日学制発布に基き大字砂子原字上林一五二八番地西念寺を仮校舎とし小学校を開設、望月弁次郎氏を教師として招き教授を開始す。これを学校の矯矢とす(西山小学校の発足である)。明治十二年及び十八年校舎焼失し、書類一切を焼亡せしため記載するを得ず」(『中ノ川村郷土誌』による)

とあり、詳細を知ることは出来ないが旧校舎に至るまでには数回の変遷があり、神照寺（元の役場跡）・三浦氏宅・金子辰美氏別宅

（現大石建設車庫跡）・渡部惣六氏宅（現在大石建設事務所の後）等を借用し仮校舎にあてたといわれる（西山小創立百年記念行事に際し菊地龍寿氏書翰）。

「各校統一の沿革を見るに明治五年学制により若松県第二大区第十一小区組合大字十一を以て区域となし、明治六年砂子原小学校を設置、同年久保田分校、同八年大成沢、牧沢分校、十一年牧沢校を廃して四ツ谷校、十五年湯八木沢、同じく琵琶首分校を許可せらる」

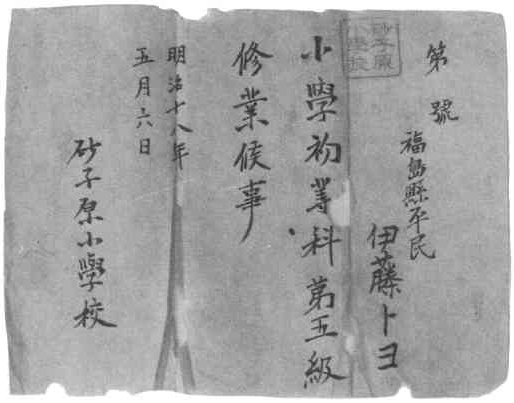
と『中ノ川郷土誌』には記載されており、学校創立を示す学校沿革誌と許可された年月日の間には若干の相異がみられるが、主として沿革誌に據ってその歩みを辿ってみる。



明治初年の教科書

明治当時の校訓

明治五年八月二日大字砂子原西念寺を仮校舎として開校、明治六年五月大沼郡第七番小学区として砂子原小学校を設置し久保田分校を設けた。同八年大成沢・牧沢の二分校を設けた。同じく四月軽井沢小学校創立、五月大成沢小学校創立（大沼郡第八番小学区）、明治九年八月二十二日久保田小学校創立（大沼郡第九番小学区）、同十年一月四ツ谷小学校創立（大沼郡第十番小学区）、同十四年四月琵琶首小学校・同九月湯八木沢小学校創立（大沼郡第十一番小学区）、十月牧沢小学校創立（大沼郡第十二番小学区）、当時の状況をみると、



明治初年の卒業証書

文殊講の幡
（明治40年・黒沢）

「明治十九年民家を借り教授す。児童数三四八名、教員数八名（『中ノ川郷土誌』）」

とある。明治二十年四月、小学令の改正に伴い砂子原尋常小学校と改正し、砂子原・黒沢・冑中・四ツ谷・五畳敷・湯八木沢を通学区域とする。又大成沢小学校は大成沢簡易小学校と改め、大成沢・芋小屋・琵琶首を以てその区域とした。更に久保田小学校も簡易小学校とし一字を以てその通学区とし、軽井沢も一字を以て学区とし簡易小学校とした。

明治二十二年四月町村制施行と小学令の改正によって中ノ川村・東川村に一の尋常小学校を設置した。明治二十五年九月九日砂子原尋常小学校と分教室を次のように定めた。

砂子原尋常小学校　大字砂子原字居平四八
大成沢分教室　大字大成沢字前田三六〇
四ツ谷分教室　大字四ツ谷字家廻一四二七
久保田分教室　大字久保田字居平五六三
軽井沢分教室　大字軽井沢字仲島一五

明治四十一年久保田分教室が独立して久保田尋常小学校となり、軽井沢分教室が付属となる。同じく四十一年八月十六日本校々舎が新築落成となり、教育体制の基礎が明確となった。

明治四十二年九月二十六日修業年限二ケ年の高等科が併置され、砂子原尋常高等小学校と改称し、名実ともに近代教育の姿が完全に整った（牧沢地区も通学区となる）。

大正二年に本校一学級減となり、同四年に一学級増となる。同六年四月大字四ツ谷字仲島に仮分教場を設けた。同じく琵琶首分教場を大字琵琶首字居平一七六に設置した。

大正十三年九月十三日本校々舎東側に増築すると共に、雨天体操場及び教員住宅を新築した。

大正十四年九月三日琵琶首分教場の増築、大正十五年より昭和三年までの間に学級増の傾向にあり、本校七、分教場五、計十二学級となった。

昭和十一年、本校々舎裏側に運動場を新設した（経費一、二〇〇円）。全地区民と青年団は全面的に協力し、労力を提供した。

昭和十五年紀元二六〇〇年を記念し、中ノ川村・東川村が合併して西山村となった。

昭和十六年四月一日国民学校令の発足によって、砂子原尋常高等小学校は大沼郡西山村立砂子原国民学校となる。同年十一月十二日高森仮教場として校舎を新築した。

昭和二十二年四月一日学校教育法施行により大沼郡西山村立西山小学校と改称し、高等科は分離し西山中学校となった。昭和二十四年五月一日福島県立会津農林高等学校西山分校が併置され、校舎の一部を貸与した。

昭和二十六年より昭和二十九年まで大成沢・四ツ谷・琵琶首の各分校それぞれ一学級増加となり、本校六、分校九学級となった。

昭和三十年四月柳津町と西山村と合併して柳津町となったので、

校名を柳津町立西山小学校と改称した。同年十二月一日大字湯八木沢公民館を仮校舎として湯八木沢季節分校を開設した。昭和三十一年本校七学級となり、同三十三年高森分校二学級となり、本校七学級、分校十学級、計十七学級となる。同年十一月四ツ谷分校舎及びへき地集会室が新築落成した。昭和三十五年十一月、本校旧校舎を取りこわし新校舎を仮使用する（講堂存置）。

昭和三十六年本校々舎新築完成、十一月大字大成沢字下原甲一八〇に大成沢分校々舎新築落成した。同三十八年大成沢分校へき地集会室新築落成、同四十年校歌制定、同四十三年校旗制定、鼓笛隊編成、昭和四十五年十一月三日へき地優良校として福島県教育委員会四ツ谷分校が表彰され、同月高森分校新校舎及びへき地集会室新築落成する。同じく本校運動場を拡張する（拡張分二、〇〇〇平方メートル）。十二月一日より湯八木沢季節分校を休校する。昭和四十六年十一月三日へき地優良校として、大成沢分校が福島県教育委員会より表彰される。同月琵琶首分校々舎並びにへき地集会室新築落成又本校体育館の新築完成をみる。

昭和四十七年十一月本校体育館の落成祝賀を兼ね、創立百年の記念式並びに記念事業を実施する。同じく学校水泳プールが新設完備された。昭和四十七年十二月十九日電気配線系統が原因と見られる校内出火があった。平素の防火訓練と隣接各校の真剣な協力、各種団体の逸早い行動などによって、最少限の被害にとどめ、翌日から平常通りの授業を完全に実施出来たことは此の上もない喜びであった（復旧所要経費七十万余円）。又、従来学校火災は原因不明とされることが多かったが、予測出来ない出火原因のために多くの示唆をなげかけ、県下一斉完全点検の緒となったことは「不時災難のもたらした貢献」とでもいうべきであろうか。

なお四十八年には琵琶首分校ＰＴＡが福島県ＰＴＡ連絡協議会より優良ＰＴＡとして表彰されたことは直接学校に関するものではないが、教育進展には不可欠の要件となるので特に記録にとどめる。

『歴代校長名』

佐藤左代松　佐川久吉　根本愈　小沢毅　星大吉　大内末吉　五十嵐善信　小沼庄佐　斎藤広記　長谷川栄蔵　遠藤磯太郎　鈴木巴　猪俣正吾　辺見清記　兼子憲治　目黒洋一　白川角美　佐久間佐一　斎藤豊之助　上野秀夫　伊藤一義　前田衛

『校　歌』

作詞　高橋新二　作曲　石河清

一、花か霞かなどやかな
いで湯のけむり胸にわき
丘に校舎にみな楽し
西山小学校　一緒に進む
野山幾坂こえていく

二、月も泉もさみどりも
心に深く光そえ
西山小学校　学んで元気

遠くあこがれ　ひいていく
三、鳥よこだまよ　こがらしよ
あしたの希望歌につげ
とうげ湯の丘空高し
西山小学校　仲よく励む
故郷山川栄えいく

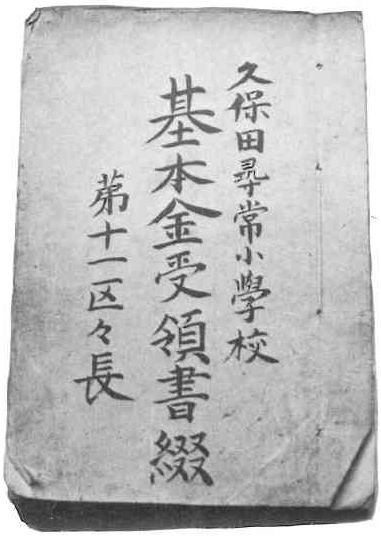
なお砂子原小学校は明治末期に高等科を併置していなかったので、この校下の高等科入学希望者は、宮下小学校の高等科で勉学している。卒業台帳にある氏名は左の通りである。

明治三十八年　伊藤定吉
同　四十　年　伊藤辰吉　長谷川緑
同　四十一年　鈴木鉄二　伊藤栄　金子キセ　金子実　小林猛
同　四十二年　伊藤広記
同　四十三年　伊藤国記　伊藤昇　伊藤幸　（以上十二名）

(三) 久保田小学校

学制発布の際には砂子原小学校（現在の西山小）の分校として発足したが、明治九年八月二十九日久保田小学校として独立し、正徳寺を仮校舎として創立する（大沼郡第九番小学区）。明治二十年四月小学令改正に伴い久保田簡易小学校となる（軽井沢も一字を学区とする簡易小学校となった）。明治二十二年四月、町村制施行と小学校令の改正によって、中ノ川村・東川村組合村に一の尋常小学校を設置することになり、再び砂子原尋常小学校の分教室の一つとなった。

明治四十一年八月二十七日、中ノ川村・東川村組合村立久保田小学校として独立し、軽井沢簡易小学校を所属の分教場とした。この久保田小学校の独立は、学区住民の学校教育に対する熱意と努力とによって実現したものであって、当時久保田地区は組合村に対し、学校基本積立金として、金三千円を寄附し十ケ年分割によって今後百ケ年後に至るまで現状維持を図るという契約を結び、毎年三十円宛寄附してきたという領収証が残されている（何年か後に残額を新木材の売却金によって一括納金し皆済したという）。この情熱が独立小学校の実現となったのであって、その伝統は今も継承され大きな支柱となっている。



基本金積立帳（久保田区長所蔵）

明治四十二年校舎増築（明治十九年、分教室として新築されたものへの増築である）。大正十四年九月十三日校舎新築落成（大正十三年九月八日、久保田・四ツ谷・牧沢・軽井沢地域住民・東川村青年団の協力により、敷地の造成・地均し等完了）。昭和十五年中ノ川村・

東川村組合村が合併して西山村となる。同十六年四月一日国民学校令の実施により、久保田尋常小学校は、西山村久保田国民学校となる。同二十二年四月一日、学校教育法の施行により、大沼郡西山村立久保田小学校と改称、同二十三年軽井沢は柳津町へ単独合併を行い、上平・市野・大谷地の各字は新鶴村へ分合になり、軽井沢分校は、久保田小学校の管轄外となる。同二十八年八月校舎の傾斜はなはだしく大修理をする（南土堤自然沈降により約十度傾斜）。昭和三十年四月一日柳津町・西山村の合併により河沼郡柳津町立久保田小学校と改称する。

昭和四十一年五月校歌、七月校章を制定する。同四十二年校舎新築のため校庭拡張をする。同四十三年十一月新校舎落成し移転完了、同四十四年五月七日旧校舎解体完了と共に校舎新築落成記念式を挙行、同八月旧校舎解体後の整備を図り完了する。

昭和四十五年十一月三日、福島県教育委員会より優良団体としてPTAが表彰の栄に浴したが、多年の努力が結実したあらわれといえよう。

『歴代校長名』

鈴木鉄太郎　天野誠一　佐藤栄喜（二回）　渡部祐一郎　小平武之助　榊原信一郎　斎藤輝博　横田新祐　土田儀雄　斎藤太郎　山口隆馬　二瓶倭夫　二瓶政郎　斎藤政二　知々田徳衛

『校　歌』

作詞　高橋新二　作曲　石河清

一、柳津　久保田小学校
小道　段坂　稲場丘
仲よく　そろって　通い合う
若萠　銀に　歌こだま
窓に明るく　学びましょう

二、柳津　久保田小学校
博士　高尾は　峯高く
呼んでる　待ってる雲に鳥
夢　限りなく　虹へかけ
空に大きく広げましょう

三、柳津　久保田小学校
月を迎える　泉あり
花　雪　こえゆく　小川あり
胸に　忘れず　進みましょう

(四) 柳津中学校

昭和二十二年四月一日学校教育法の施行により、大字柳津町諏訪町甲六の一に仮校舎を設け創立し、四月二十五日野口久人校長以下職員六名が発令されたので、新制中学校建設という使命感と意欲に燃えて五月五日開校式を行った。同二十三年十一月二十五日大字柳

津字上村道上乙一五八〇に、火災全焼による柳津小学校と共に新校舎を建築し落成を見たので移転を完了する。同二十四年十一月三日校歌を制定、二十五年十二月三十日悩みの種であった屋内運動場(講堂)が新築され落成をみた。二十八年一月十日生徒増に伴い四教室を増築落成。二十九年五月二十五日軽井沢季節分校舎を新築落成。三十一年十一月十日教育活動の充実のため第二校舎を新築し落成をみる。三十四年十二月一日時代に即応すると共に指導内容の充実向上をめざし、軽井沢季節分校を廃止して仮寄宿舎の開設をはかり実現した。三十六年十月さらに四教室を増築落成。

昭和四十年・四十一年の二ケ年福島県教育委員会より「学力向上研究推進校」の指定を受け研鑽努力する。四十三年四月一日遅進児等の救済をめざし特殊学級を設置する。同年六月二十六日水泳プール竣工(二十五メートル×十五メートル)、四十四年十月三日新校舎建築起工式が行われる。十月九日二十五人編成のプラスバンドを六十余万円を投じて設置する。四十五年と四十六年福島県教育委員会の指定により「望ましいＰＴＡのあり方」を父母と共同研究する。昭和四十五年八月二十日現在建築の粋を誇る鉄筋三階建(二二六五・一二平方メートル)の新校舎が落成する(工費八、七〇七万円)。

四十六年日本職業指導協会より「進路指導」について研究指定をうけ、その究明につとめる。同四月二十日柳津中学校後援会が結成される。四十八年四月二十四日屋内体育館が新築落成する(工費四、一三五万円)現在在籍生徒数二四四名である(昭和四十九年度)。

『歴代校長名』

野口久人　長谷川富伴　五十嵐健之助　大竹英三　大内孝　安西章　酒井幸雄　笠間主税　斎藤正

『校　歌』

作詞　源後三郎　作曲　佐藤広市

一、流れも清き只見川
　輝く歴史　柳津の
　わが学び舎に生いたてば
　希望あふれて幸多き

二、平和の光　日本の
　礎きづく民として
　紅葉に花にたぐえつつ
　姿やさしく美しく

三、嵐に雪に打ちかちて
　心をみがき　身をきたえ
　学びの道にいそしません
　文化の花と薫るまで

(五) 西山中学校

昭和二十二年四月一日学校教育法施行に伴い、西山小学校の一部を借用、仮校舎にあて新制中学校として創立し発足した。講堂を仕切った臨時の仮教室は音声の交錯等もあり、教室数も限定されてお

り、自由な活動にも制約があり、望ましい環境条件ではなかったが、西山小学校の中堅教員の大半が中学校に移っていたので、教員組織の上では充実していた。むしろ小学校本校が二部授業を実施するなど新学制による苦難の道を辿ったのが実態であった（西山小本校職員・校長、男教諭一、女の助教諭一名が残り、青年学校教員が臨時応援で授業を実施した）。

昭和二十四年九月十五日待望の新校舎落成、十二月一日より高森・琵琶首に季節分校を新設したが、なお積雪期の遠距離通学事情を考慮し、昭和二十五年十一月二十日生徒用寄宿舎を（一部教員宿舎も含む）校舎南側に新築落成、この年、学校林を設定し植林並びに校歌の制定を行う。同二十九年水道が竣工する。

昭和三十年四月一日町村合併により柳津町立西山中学校と改称、同三十四年十一月五日校旗の制定、同三十六年十二月従来教室の間取りが狭く、その上生徒数が増加している実情から校舎の北側に資料室・理科室・普通教室・音楽室・技術室等を増築落成する。同三十八年五月大字砂子原長坂の地（温泉の近く）に寄宿舎を新築落成、同高森及び琵琶首季節分校の増築完成をみたが、寄宿舎をさらに充実することをめざし、三月三十一日両季節分校を廃校とする。同四十年十一月寄宿舎を増築落成、同四十一年一月屋内体育館新築落成し、二月七日ステージ幕を新設する。四十二年四月制服を制定する。同四十六年小学校と協力し校庭の拡張を実現し、四十七年学校用水泳プールを完備する。同年、寄宿舎の近代化を図り南側半分を改築、食堂・スチーム暖房・温泉浴場を備える。鉄筋二階建新館落成、県下稀にみる寄宿舎となった。翌四十九年四月より通年制寄宿舎を実施している。

西山小・中学校の学園地区（左・西山小、中央・西山小屋内体育館、右・西山中）

『歴代校長名』

阿部秀夫　伴野五郎　渡部賢一郎　佐藤彦左衛門　小堀正男　渡部蓊　上野秀夫　山口佐幸　鈴木茂樹　金田俊雄

『校　歌』

作詞　阿部秀夫　作曲　福大音楽部

一、山狭の出湯の煙り香う丘
　建てる学び舎　うるわしく
　若き希望に燃ゆるもの　ここに集えり

二、空高く聳ゆ博士を望みつつ

学びの庭に　友よいざ
希望大きく　画かなん強く正しく
三、水澄める　滝谷の流れ永遠に
若き魂　清めつつ
やがて　西山栄ゆまで学びはげまん

(六) 会津農林高等学校西山分校

昭和二十二年四月、学校教育法の施行によって今まで夜学会、実業補習学校などの歴史を経て青年教育の中心的役割を果たしてきた青年学校の制度は、昭和二十三年三月末を以て終止符をうたれることになった。

「これからの青年教育をどうするか」ということは村の行政担当者の課題でもあり、青年学校に在籍しながら中途で廃校の憂目にあう生徒達の悩みでもあった。青年学校本科三年終了から（小学校高等科卒業後本科に入る）会津農林高等学校宮下分校三年に編入学する男生徒もあった。青年学校本科二年を終わって、新制西山中学校三年に編入学する女子生徒の幾人かもあった。

このような時代の流れと、自営者養成、家庭生活における専門的知識技能の習得という青年教育に対する強い願望とが基礎となり背景となって、会農西山分校の設置が進められたのである。

昭和二十三年十二月一日、西山小学校舎の一部を教室として裁縫を主とした季節学級を開設し、青年学校中途終了を余議なくされた女生徒を中心に修学の道を開いた。

昭和二十四年五月一日、西山小学校を仮校舎にあて農業科・家庭科各一学級をおく県立会津農林高等学校西山分校を開設した。

同年九月十五日西山中学校の新築落成と共に同校に移ったが、教室数も少なく、又狭い教室であるというような事情も重なって授業完全実施は期し難く、しばらくの間は西山小・西山中に分散授業を行うという苦難の道を歩まねばならなかった。昭和二十七年四月、こうした中にも分校主任風間四郎教諭（林業科）を中心に計画を進め、当時の西山村大字黒沢字千石地内に一・二ヘクタールの演習林を設定し、長期的展望に立つ経営の緒についた。

同年五月十七日独立校舎の位置を大字砂子原字長坂地内と決定し、十一月五日待望久しかった新校舎の落成を見、記念祝賀式を挙行した。昭和三十一年十月九日払暁、原因不明の出火により校舎は全焼、宿直職員一名の焼死という惨事がおこった。すぐに復旧対策を講じ、西山中学校寄宿舎、役場支所二階等を仮教室にあてて授業を実施したが、前途ある若い優秀な小林博教諭を失ったことは、分校の歴史の中で忘れられない痛恨事であった。

同年十一月二十日仮校舎（一二九平方メートル）を建設、同三十二年十一月二十三日新校舎を西山小学校表校庭南端に工費三〇九万円、二階建三三一・八平方メートルの再建を決定し、すぐに地鎮祭を行った。

昭和三十三年三月三十一日新校舎建築落成、同四月十一日より授

業開始、五月十日新校落成の式典が挙行された。同三十五年分校管理運営研究校と福島県教育委員会指定され、管理面の強化・運営の合理化をめざし懸命な努力を傾注し、その成果をまとめる。これらを基礎資料としながら、昭和三十七年六月十七日被服室（六四・八平方メートル）の増築及び校内改装を竣工、三十九年一月二十日には普通教室二教室を増築、四十三年四月一日農業実習地（〇・五ヘクタール）を設定（借地）、四十三年九月一日に農場管理室（二六・五平方メートル）を新築、四十四年八月十五日は従来の被服室（六六・二平方メートル）に廊下を新設し普通教室に改装、四十五年八月十日校舎を増築し（十九・八平方メートル）応接室及び石炭庫を設けた。

四十六年十二月二十七日、校舎二階と旧役場支所とを結ぶ渡り廊下の竣工（一六・五平方メートル）、四十七年一月一日より支所全部の借用決定（二四四・二平方メートル）、地域社会と共に幾多の苦難をのり越えて充実発展を図り、地域の人材養成をめざし、努力を重ね新しい歴史を求めてきた学校ではあるが、高度経済成長による産業形態や複雑多様化する社会情勢による労働力の配分の変化は、年毎に入学生徒の漸減となってあらわれ、学区制の再編成などと共に遂に昭和四十九年四月一日から生徒の募集停止となり、昭和五十一年三月を以て、その幕を閉じることになった。

卒業生総数　三四四名（昭和四十九年三月現在）

『歴代分校長名』

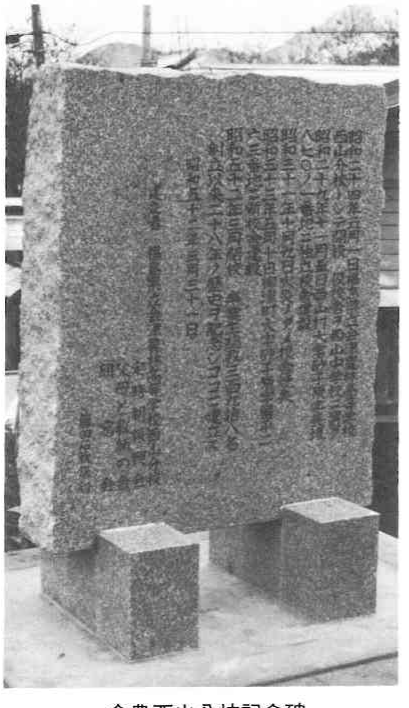
田部董　風間四郎　平沢潤　平野新平　石見金衛　五十嵐済　小柳国江

『校　歌』　作詞　土井晩翠　作曲　田村寅彦

一、磐梯山の雲に入る
雄々しき姿仰ぎみて
我が向上の意気みがく
学びの窓にいそしむよ

二、国の大本我が道を
おきていずくに求むべき
見よ堅実と勤勉の
乃り農林の学びの舎
高き使命も心せよ

（以下略　本校に同じ）



会農西山分校記念碑

(七) 会津農林高等学校柳津分校

昭和二十三年四月二十八日、柳津町立柳津小・中学校を仮校舎として、柳津町大字柳津字上村道上一五六〇番地に開設する。

地域の要望に応え、農業科・家庭科の二科を設置し、農業実習地十五アール余（一反五畝余）を確保経営する。社会事情の変化に伴い生徒数も減少の一途を辿り、遂に昭和三十八年三月三十一日廃校となる。

開校以来の卒業生は農業科八八名、家庭科七〇名、計一五八名を社会人として送り出した。

『歴代分校長名(主任)』

矢沢正　近藤与志信　針金滋　小柳国江　荒明静夫

第二節　文化団体

(一) 柳津婦人会

一、創　立　昭和二十年九月

二、会員数　創立当時　八五〇名

現　在　五〇五名

「内訳」

一王町	二五名	諏訪町	一八名
寺家町	一九名	門前町	一三名
岩坂町	一六名	大平町	二九名
柳ケ丘	一三名	細越	一一名
安久津	二八名	出倉	一四名
小柳津	五名	大野	二四名
大野新田	六名	八坂野	一二名
石神	二二名	石生	九名
古屋敷	一三名	新村	八名
小ノ川	一〇名	中野	八名
長倉	二二名	猪ノ鼻	一七名
上野老沢	一七名	下野老沢	二七名
麻生	一一名	小巻	二四名
石坂	一三名	椿	一三名
藤	三三名	長窪	六名
軽井沢	一一名	黒滝	八名

三、経過及び事業の大要

婦人の要求は、新しい時代に適応する婦人となり、民主的な家庭を育て、その環境のなかで子供の人間形成につとめ、ひいては社会の進展に一翼を荷うとして、自主的な活動をすすめている。

① 各支部長研修会（宿泊研修）

② 講演会（年一回以上）

③ 各種講習会開催

④　研修旅行
⑤　文化祭の努力
⑥　敬老会の協力
⑦　その他

四、表　彰

①　昭和二十四年十一月三日　福島県教育委員会表彰
②　昭和三十四年七月十五日　自治大臣（国務大臣）表彰
③　昭和四十九年十一月三日　福島県教育委員会

五、歴代会長名

小川トメ　水野サキ　渡部サク　笠間幸子　猪俣幸　岩渕トシイ　月本ハル子　渡部ユミ子　松谷恭子（現任）

(二)　西山婦人会

一、創　立　昭和二十二年九月

二、会員数　創立当時　三〇〇名
現　在　二〇四名

「内訳」
砂子原―一六名　黒　沢―一六名
胄　中―一六名　芋小屋―　九名
大成沢―一六名　琵琶首―一二名
高　森―一九名　牧　沢―一六名
四ッ谷―一三名　五畳敷―一七名
湯八木沢―二一名　久保田―二三名
大　峯―　五名　鳥　屋―　五名

三、経過及び事業の大要

①　初め地区全域を対象とせず、西山小学校本校区を単位として発足し、漸次に全域に及ぶよう拡大して現在に至った。
②　自主的・民主的団体として活動を展開するには、新しい時代の理念を身につけることからでなければならないと考え、学習会や伝達講習を開催することにつとめ、月二回位づつ会合を開いている。
③　調理実習等を通じ、健康保持・生活改善等に意を用いている。
④　皇居勤労奉仕作業、敬老会開催の協力等に参加し、婦人と社会の密接な関係や新時代の感覚醸成につとめる。
⑤　公民館の主催する村民運動会、産業文化祭には、④の目的にも添うよう積極的参加をしている。
⑥　婦人に必須の講習会（育児・料理・衣服・生花・服装の現代化）・旅行を開いている。

四、歴代会長名（就任順）

天野テルミ　天野ミヨシ　金子セン　伊藤カツミ　金子セン（再）　金子ハツネ　坂井フク　大石直子　天野容子　羽賀サダ子（現任）

(三) 柳津連合青年会

わが町は多様な職業のため、農業・商業・工業・その他の職業に従事する青年が目的にむかって組織をとおして活動している。

一、創　立　昭和二十二年

二、単位団と会員数　創立当時　五五名

現　在　四〇名（男女）

。郷戸青年会　。中野小ノ川青年会　。野老沢青年会

三、事業の大要

緑の集い・旅行・先進地視察（本年山形県）旅行・スポーツ交歓会・町民ハイキング参加・博士山開き参加・ダンス講習会・映画会・山林下刈

四、歴代会長名

長谷川常栄　斎藤隆　佐藤一大　渡部照雄　鈴木末夫　斎藤伊作　山内貞夫　五ノ井豊　岩佐拓　長谷川明水　増井邦衛　田巻洗　斎藤正彦　斎藤恵介　長谷川昭平　増井久人　斎藤清雄　岩渕清幸　斎藤秀夫　田崎利栄

。創立当時から昭和二十四年迄会長名記載なく不明。

。右の会員の中には、再選された人もある。

(四) 西山青年団

『戦　前』

青年の向学心と情熱、そして集落の警備など、共同体の平和と修養を目的として結成されていた。

一、創立は明治四十四年三月二十七日で、それまで各大字毎に青年団を組織していたが、このとき中ノ川村連合青年団として発足した。発足のときの役員及び会長名等は現在は不明。

二、改組は大正四年四月十六日で、このとき全村の各大字青年団の名称を大字分団として、中ノ川村青年団と改組した。

三、大正六年三月三日福島県準則により、全県的な組織の一環として再編成した。

このころ女子も処女会から脱皮発展して、男女会員となった。

四、活動の状況については、記録がなく不明であるが、総会・講演会・遠足・月次修養会として、読方・算術・算盤・社会の状況などを勉強していた。

また大正十五年ころ、文芸と行事などを編集して、雑誌「湯の岳」を発刊したが、第五号で終わった。また男子は夜学、女子は裁縫の習得なども行った。

五、昭和十二年、戦時体制下になると青年団の大改革が行われ、戦時要員としての自覚への種々な行事が取入れられ、青年訓練所の発足と共に、自然に独自の活動は行われなくなった。

六、歴代会長名

伊藤伍一　鈴木鉄一　金子馨　伊藤巌夫　長谷川緑　伊藤勇

その後は、小学校長が会長になったこともある。大正十四年頃は、砂子原小学校長五十嵐善信氏であった。

『戦　後』

戦後は戦争体制の旧組織は消滅同様になったので、民主社会の明日を背負う者として、青年の健全な育成に期待をかけられた。そのため青年自身も各集落に青年団を組織し、西山連合青年団を結成した。

一、創　立　昭和二十二年十一月

二、会員数　創立当時　二六〇名（男女）

現　在　五九名（男五四、女五）

「単位支部会員」

砂子原―三名　黒　沢―三名
胄　中―一名　芋小屋―二名
大成沢―八名　琵琶首―一九名
五畳敷―二名　湯八木沢―一名
牧　沢―一名　四ツ谷―三名
高　森―三名　久保田―一二名
大　峯―一名

三、重なる事業

。総務部

女子青年研修会・国内派遣研修・会津青協体育大会・町政を聴く会・会津青協青年大会・青年大会・西山青年祭

。社会文化部

スクラム発行（年三回）・緑の集（一泊二日）・高齢者を励ます会・文化財研修

。保体部

博士山開き・オリエンテーリング・ダンス講習・キャンプファイヤー・ハイキング・国民体力テスト

。常任委員会

あゆみの発刊・講演会・町議会傍聴

四、歴代会長名（就任順に氏名のみ記す）

金子憲治　鈴木彦衛　伊藤惣一　伊藤三十郎　羽賀好弘　天野一好　金子繁　佐藤寅喜　伊藤毅　天野昭一　菊地重美　伊藤毅（再）　佐藤一二三　伊藤一孝　伊藤薫　佐藤正人　天野十志　鈴木武継　角田君夫　荒明正一　鈴木明　井関庄一　鈴木明　木ノ戸和栄（昭和五十年）

五、各単位で特色ある事業

特にないが、春神楽の運営・盆踊の運営・分校運動会の援助・映画会の実施・地区町民運動会の共催（久保田）　以上

(五) 瓢吟社（ひょうぎんしゃ）（俳句研究）

一、創　立　昭和二十四年三月

二、発起人

長谷川美材（杜月）　渡部春雄（柳春）　新井田正男（葫舟）
佐藤一大（一歩）　小島安男（柳水）　新井田忠男（忠穂）
相談役　故星野傳造（里芋人）

三、組　織

猪苗代兼載連歌

個人制として俳歴と年長の故を以て、長谷川美材氏を主宰として今日に至った。

四、行　事

毎月例会を開き相互研鑽に努めている。さらに各地に吟行をなし、機関誌「寒椿」を発行し、昭和四十一年一月より二ケ年継続したが、諸般の事情により現在休刊中である。しかし季節的に作品その他を編集し、集大成として発行している。

また昭和四十一年八月十五日、吟社結成以前より指導助言をうけて、この吟社の発展に強い影響を与えた、故新城猪之吉氏（杏所）の句碑、

一舟を漕いで眼下のダムの秋

を吟社一同協力して、虚空蔵堂境内に建碑した。

また昭和四十五年十一月二十日、長谷川美材の句碑、

魚渕の魚朱にまみれ崖紅葉　　杜月

を、新井田忠男の句碑、

千葉鶴ゆれてみ堂の春明り　　忠穂

の二碑を前者は端光寺山公園に、後者は昭和四十七年秋奥之院境内にそれぞれ建設し終わった。

五、同　人

一三名、準同人九名で会津若松市・西会津町・会津坂下町等の各結社と常に連絡提携し、相互研鑽と親睦の実を挙げている。

六、表彰者

昭和四十年十一月三日、渡部春雄（柳春）は、県文学賞を授与され、柳津町の文化水準の高さを示した。

七、顧　問

円蔵寺住職、水野興宗師を推戴している。

瓢吟社一行は昭和五十年七月二十日、わが町の大字久保田字田代の近くにある有名な観音山に吟行した。文政期に創祀した野仏三十三観音像が並祀されている。一行はこの観音菩薩を心から巡拝して、そこで句筵を開いた。そのときの秀句を揚げると、

夏山は何も語らず菩薩住む　　柳　春
かなかなをまた呼返す聖観音　　井竿子
ひぐらしの鈴振る山に仏満つ　　霞　松
マリヤ観音頬杖蜩ふりかぶり　　所　生
野仏の母恋う瞳露潤む　　鶏　堂
尋ね得し仏笑顔に汗をふく　　忠　穂
もの想う観音に青嵐やさしかり　　杜　月

苔むして何か思案の観世音　　栄　二
三十三仏丸山暮れて蛍飛び　　てつ女
マリヤ観音の頬も豊かに青嵐　　とみ子

何れも秀作のみで、句作レベルの高いことを示している。

(六) 柳津民謡研究会

わが町は美しい自然に囲まれているため、人心も温和で審美的なものを好んでいる。

九月堂お篭の夜は、全会津の民謡愛好家が集まり、一夜ほとんど寝もやらずいろいろな民謡を歌い続けた。その中でも歌垣（ウタガキ）の遺風の歌会があり、素朴な風格をもつ玄女節は最も多くそして永く続いた。八百屋お七の段物あり、石づくし、村づくし等や即興作詩の掛合などがあり、聴く人々に強い印象を与えた。

それらの苗圃は、町内に民謡愛好の男女が出て、互に集会して親睦と研究と練習を積もうとの議がおこり、柳津民謡同好会を結成し、のち会津民謡研究会を昭和二十六年創立し、同年四月十五日第一回創立総会を町立柳津小学校で開いた。参加会員六〇名の盛会であった。このとき初代会長長谷川富伴、副会長に長谷川義雄・山名睦であった。

現在は、会長山名睦、副会長藤本春雄・藤田茂・小貫タケヨである。

現在会員数一五〇名、和気あいあいの中に運営されている。

会の行事としては、各種の団体機関と総合的に連絡して、スムーズに進んでいる。そして研究会・講習会・発表会・交歓会・コンクール開催及び出場、その他会員の意見を尊重し民主的に運営している。またこの会に常に後援をしている、増井源一氏・田崎伝氏には会として感謝状を贈った。この研究の結果はすばらしい成果を挙げ、同会員藤田新一郎・金坂正子・後藤熊三の三氏は、会津民謡研究会の講師として、会津中央での講師となり指導にあたっている。柳津町として喜ばしいことである。今後のいよいよ発展されることを祈る。

(七) 西山民謡愛好会

一、創　立　　昭和四十七年四月五日
二、会員数　　二八名
三、行　事
　年次大会（会員の発表会）
　講習会
　民謡交歓会（他町村の同好グループと）
四、歴代会長名
　初代　羽賀　隆　昭和四十七―四十八年
　二代　天野一好（現任中）
五、その他
　古くから西山地区に唄われ、また踊り続けてきた甚句を遺す

ため、現在その練習を行っている。

また、大字琵琶首出身の現代歌手鈴木君も応援も続けて、郷土の振興を図って努力中である。

(八) 華道成月流　伊藤（紀峰）社中（岩坂）伊藤紀子

一、名　称　成月流盛花投入教授

二、創　立　昭和三十七年三月

三、会員数　一五名

四、行　事

町文化祭の華道展へ会員の作品展示。

昭和三十四年九月より郷戸駅へ花を生けていたが、無人駅となり中止す。

現在は、柳津駅への小さな一瓶の花を交代で管理して奉仕中である。

(九) 華道会　（表千家流角田（宗鈴）社中）（一王町）角田スズ

一、創　立　昭和三十七年十月

二、会員数　一〇名

三、行　事

初釜・ゆかた茶会・野立

この社中は会津若松の表千家流会津支部に所属し、毎年同支部と共に御薬園・市民会館などで実施している。

四、その他

最近茶の湯を好まれる女が多くなり、学生・結婚適齢期の娘・主婦・サラリーマンの多様化が目だってきた。茶道に通うようになり、娘らしさ、しとやかさが躾かってきてよろこばしいことと父兄から話をうけている。そのほかに小原流いけ花の免許者であるが、華道は特別教授を行わず、茶道の中の茶花として場に所に即して、その真髄を教え生けている。

(一〇) 小原流華道会　（佐藤秀光―しづ）（一王町）

一、名　称　華道会小原流社中

二、創　立

昭和二十七年十月七日から成月流教授をはじめ、同四十七年より小原流に改めた。

三、会員数　一五名程度（他に小中学生教授す）

四、活　動

町文化祭の花展に出品するほかに、一王町熊野神社祭礼の七月十五日に拝殿に出品する。

五、その他

近年小中学生もいけ花熱が高まり、遠くバスの通学生もいて熱心である。特にいけ花後の自己の花のスケッチもすばらしい。

冬季間も工夫して材料を集め休まない。

また野草の咲く期間は、山・原・河原に咲く優しく美しい花

を素材として教えている。

(二) 古儀茶道藪内流矢部社中

一、創立年月日　昭和四十二年九月十日

二、創立までの経過

昭和三十九年四月、京都家元（藪内流）にて五十年間当流を学び京都においてまた大阪において茶道教授を続けられた、仁岸いまが妙心寺派のこの流を、同じ妙心寺派の臨済宗円蔵寺地内の矢部家に伝えたい懇願により、昭和二十九年三月から仁岸いまが習いはじめたのが最初で、その頃の矢部氏は裏千家二十代から別な流派を習っていたときであった。熟考の末道具一切を求めていま師に四ケ年の寝食を忘れての修業を続けた。また小池富子・上田妙・佐藤恵子・渡部登志子・一ノ瀬初子も加わり、矢部チョノが総務役をつとめた。

その後、花園天皇献茶に家元藪内紹智宗匠と出席し、昭和四十六年東本願寺会館で指導者講習会、山形県光禅寺茶会には若宗匠より、また京都芝伸庵では宗匠、若宗匠の温習をうけるなどして、心と技の修業を積んで現在に至っている。

三、会　長　矢部チョノ（茶千代）

四、会員数　三〇名（内八名結婚他出―行事参加）

五、重な行事

一月九日　初釜

六月七日　剣仲忌―時節により野点にすることもある。

十一月　口切―十一月の第二の亥の日

六、歴代会長名

仁岸いま　矢部チョノ

七、藪内流は県下唯一の社中で、今後の発展に努力中である。

会員名は省略する。

(三) 柳津町盆栽会

山と岩と水に恵まれたわが町の四周は、環境そのままの盆栽である。従ってここに自然に生けるもの、あるものを小さい世界に写して、一つの芸術作品とすることは、最も楽しいまたそれを愛育する美しい情操は、人間形成としての要素である。こうした同好の士が集まり、さらに研究親睦を図ろうとして創立したのがこの会で、昭和三十九年七月十二日、会員七四名で創立した。

しかし半数近くが農民のため各集落地区に連絡員をおき、会の運営を円滑にしてきた。しかし、各種の個人事情もあり現在会員数は三〇名である。

行事としては、展示会（町文化祭に協賛）・講習会の開催、これは主として植替・針金巻の技法・施肥その他の肥培管理の研究をなし、さらに、先進地視察及び各種展示会々場の見学等を催して研究を高めている。

また初代会長とし、昭和三十九年から十一ケ年間を勤めた佐久

間佐助氏の功績は大きく、二代会長として現在小貫才一氏が熱情をこめて、会発展に努力中である。わが町は、資材としても見ようによっては豊富である。町として一層の発展を望んでいる。

(三) 未亡人会

昭和二十三年七月ころ、柳津町未亡人会として発足し、相互の福祉についてそれぞれ活動を続け、未亡人としての生活意欲を燃やしている。創立について活躍したのは若林ミヂノ氏で、会の指導に情熱を捧げて、活動の基礎を固めた。若林氏は、また民生委員として活躍し、自己を忘れて社会事業に奉仕し、一方未亡人として苦しい生活の中に子女の教育に努め貞節を守った模範として、厚生大臣の表彰をうけている。会員もこの人を模範として、ひとしく尊い、英霊の供養と一致協力して、たがいに慰めあい、励ましあって生きている。

西山未亡人会とも合併して、年一回の総会をひらき親睦を図っているが、その他の会の行事は地区毎に実施している。本年は西山未亡人会は、全員で会津三十三観音巡りにより、修養と慰安を行うなど活発な様相をみることもできる。しかし福祉の成長によって、協力もゆるみ、会員の物故者も多く、次第に会の活動もうすくなるようにも考えられる。

柳津未亡人会

一、名　称　柳津町白百合会

二、創　立　昭和二十五年

はやく結成したい考えを会員は持っていたが、会長に就任する人がなく、漸く結成し現在に至る。

三、歴代役員名

①　会　長　若林ミヅノ　斎藤キヨミ　小野サク　小池サメ　斎藤マサコ

②　副会長　斎藤キヨミ　二瓶トミ子　渡部トミ子　斎藤マサ子　渡部トミ子

四、主なる事業

①　資金は思うようでないので、日用品の販売などをする。

②　母子家庭の慰安と激励を行う。

西山未亡人会

一、名　称　西山いづみ会

二、創　立　昭和三十六年十月一日

三、会員数　創立当時　三五人

現　在　二〇人

四、役員名　会　長　坂井フク

副会長　伊藤カツミ

庶務・会計　菊地フジイ

五、主なる事業

①　販　売　タワシ・ハンカチ・チリ紙・くつ下・エプロン・ズボン。

②　研修旅行　文化財拝観及び神社・仏閣参詣。

③　その他　会員の希望による。

(三)　京都妙心寺花園流無相教会円蔵寺支部

一、創　立　昭和三十四年十二月二日

二、沿　革

昭和三十二年円蔵寺信徒団体参詣で、福島市郊外黒岩虚空蔵尊に行った時、他の団体の和讃奉納を聴き一同は、その美しさの雰囲気に浸り、自分たちもこの和讃唱和をしようと常日頃考えていた。昭和三十四年たまたま妙心寺花園大学生が円蔵寺に参り、法話を拝聴し、冴えた声で和讃・御詠歌を実演されたのに、強い刺激をうけ、来参者一同で講を結成して、和讃御詠歌を温習しようと、水野住職に申入れ、世話人を上田猪之助老翁に依頼した。同年十一月志望者約五〇人が参集、講師として、宮城県塩釜の東園寺住職千坂秀峰師を招き、第一回の御詠歌講習を開いた。みんなが法悦を体得し、会員一五名で創立し、現在会員二〇名となった。

三、行　事

塩釜東園寺千坂秀峰師の指導をその後何回も受講し、課題を与えられて練習をした。即ち、

妙心寺開山大師御誕生御和讃

妙心寺開山大師伴深御和讃

妙心寺開山大師御入定御和讃

等でそのほかに、千坂師選曲の柳津虚空蔵縁起御和讃も練習は終わった。

その他講員の旅行で、伊勢参宮と京都本山詣を行い、管長面接の上、各人色紙を戴いた。

毎月十三日には、虚空蔵御縁日なので、全講員御堂に参集し、月例会を開き、信仰心のいよいよ深きことと、和讃御詠歌の練磨と親睦を図っている。

四、会員数及び講費　加入二四名。月二〇〇円。

五、栄　誉

①　昭和四十二年三月、無相大師御誕生地長野市で、開山六〇〇年祭全国大会（参加者二、〇〇〇人）において発表し、初参加であったが優賞の入選となった。

②　昭和四十九年九月、松島端厳寺においての全国大会地方大会に講員一五名出席し、左の賞状をうけた。

団体奉詠規定の部優秀賞

同　自由の部優良賞

六、役　員　講　長　上田猪之助

副講長　長谷川美材

会　計　　小貫タケヨ

(五) 岩代柳津福満虚空蔵大菩薩御和讃

帰命頂礼岩代の　福満虚空蔵大菩薩
平城天皇御在位の大同二年のその昔
弘法大師は秘法もて　唐の霊木三断し
祈りて海に投ぜらる　流れうつりてその一つ
水影清き只見川　有縁の霊地山の辺に
光りかがやき漂えり　河辺の翁これを得て
仏の霊夢かしこみつ　大師の巡錫まつべしと
大師訪れ錫をとめ　心をこめてぞ彫り給う
ここに会津は柳津の　禅閣名刹円蔵寺
菊花の御紋かしこくも　その名も床し菊光堂
一千一百有余年　おわしまします大菩薩
世々の帝王武将がた　長幼貴賤のへだてなく
只御仏の誓いをば　仰ぐも嬉しよろこばし
福満虚空蔵大菩薩　南無虚空蔵大菩薩

御　詠　歌

円かにも蔵まる月のかげ見れば
心にさわぐ　浮雲もなし（鴨川節）

流れての世にもたえせじ只見川
ただ御仏の深き誓いは
南無福満大菩薩　南無福満大菩薩（雪江節）

(六) 曹洞宗梅花講真光寺講

一、創　立　　昭和四十七年九月（正式認可）

二、沿　革

昭和四十六年十二月から、希望者数人で和讃練習をしている本寺兼務住職寿上千年師から、曹洞宗梅花流詠讃歌が、教化活動のために行われていることをきかされ、希望者で演習を行っていた。このことが老婦に知れわたり、現在のような盛会になった。

三、会員数及び会費　　現在二一名。会費集会毎一〇〇円。

四、行　事　　毎月一回温習奉納。

毎年一回、県曹洞宗第十九教区（河沼郡・耶麻郡）の婦人和讃講習会に多数出席する。また講員家族逝去の際は、施主の希望があれば追善供養和讃を行う。

五、役　員　　講長　寿上千年（兼務住職）
補長　桑原春
役員　長谷川キン　五野井ナヨ　笠間芳子

(七) 高齢者学級福寿学級

老人福祉が叫ばれると、老人を軽視しがちになりつつある現代社会風潮に、一つの反省を促した。祖先や親を大切にすることは、

道徳の重要な要素であったが、高度な物質文明が浸透するようになると、生産力の少ない、そして購買力のない老人は軽視される傾向にあった。このとき昭和三十八年老人福祉法が施かれると、老人自身も社会の進展に添うような努力をしようとして、健康と修養につとめる意欲がわき、老人学級、あるいは老人大学という学習活動と実践への努力が歩み出した。

老人福祉の運営は町村役場の総務課で所管し、学習については、町村教育委員会管掌の公民館で一切を運営するようになった。社会教育関係者は、「生涯教育」というキャッチフレーズにより、老人も啓発し学習意欲をもりあげた。

わが町でも昭和三十八年度から「福寿学級」と命名し、学級名だけでも、柳津福満虚空蔵尊を連想させるような名称を選んだ。

このとき、「福寿学級は社会教育活動の中に位置づけ、意図的に立案計画することとし、学習カリキュラムや事業等を民主的に運営しはじめた。

このとき異常なほど熱意を持っていた故佐藤栄一氏は、諸地区の視察なども行って、第一代福寿学園長に推されて、この発展に尽力された。

創立当初一〇〇名足らずの会員は、学習の有益なことを知り、追々増加し、現在二三六名にふくれあがった（男一六三名。女一七三名）。

そして毎月一回の定例日八日の開講をたのしみにしている。

この盛況は会津は勿論、県内著名な老人学習町としてきこえ、参観者及び交歓会などが年数回行われている。

学習に興味をおこした会員は、自らの学習の一端として、自ら文章を書くことに抵抗を感ぜず、会誌発刊の議がおこり、「ふくじゅ」を昭和四十年に創刊し、現在第十号まで続刊した。

内容も各会員の研究、随想等その他郷土研究などもあってバラエティーに富んでいる。

昭和三十九年には、全会員の意志により、後継者へのプレゼントと、わが町の財政援助をする愛町の精神から、老人の山の経営をはじめた。

そして、町長とは昭和四十年に契約書を交換した。それによると、

場　所　柳津町大字柳津字上村甲一四五一番地

面　積　一反六畝（杉三〇〇本植栽済）

管　理　柳津町福寿学園（年二～三回手入中）

処　理　成木するまで一切老人クラブ（福寿学園）で手入し、事業達成後は町へ寄贈し、公共事業のため利用する。

契約時　昭和四十年三月二十日

契約者

柳津町長　飯塚政悟

老人クラブ会長　佐藤栄一

となっている。

植込の際は、佐藤栄一外三〇名の代表によって行われた。

現在樹勢頗る良好で将来有望である。

こうして、老人層は学習も植樹もまた社会奉仕も和気あいあいで、実に望ましい状況というべきであろう。

歴代会長は左の通りである。

第一代　佐藤　栄一　（昭和三十二～四十六年）

第二代　鈴木伊佐美　（昭和四十七年―現在）